

A - V 5 9

中 央 大 学
映 像 言 語 メ デ ィ ア ラ ボ
運 営 委 員 会
発 行 2 0 2 2 年 3 月 2 5 日

目次

2年間の遠隔授業（浅岡 夢二）	1
「勁(つよ)い言葉」と双方向オンライン授業の可能性（山本 朗）	3
進化と Evolution（上村 慎治）	6
2021 年度実績報告	
映像言語メディアラボ運営委員会委員	9
映像言語メディアラボ委員会議題	10
映像言語メディアラボ運営・管理業務	11
映像言語メディアラボ教室使用数	12
AV 自習室学部別利用者数	12
IT 自習室学部別利用者数	12
購入教材一覧	13

2年間の遠隔授業

法学部准教授
浅岡 夢二

COVID-19の蔓延により、2020年度と2021年度はインターネットを通じて遠隔授業を行なった。その経緯を振り返り、困った点、良かった点、その他について記述してみようと思う。

まず、2020年度であるが、いきなり4月から遠隔授業ということで、右も左も分からず（manabaの使い方さえ分からない）、大慌てで授業に取り組んだ。前期では、すべての授業で、「課題指示型」かつ自習型の授業を行なった。

まず、1年生の文法の授業であるが、専任教員が協力して教材を探し、ネット上にLa Grammaire Active du Françaisという自習型の教材を見つけ、これを文法担当の教員全員が共通で使うことにした。文法の説明、発音の学習、練習問題、などかなり充実している教材である。1週ごとに学習範囲を指定し、練習問題を提出させて、それを添削・採点し、成績の目安とした。ただ、これだと、学生たちがどの程度理解しているのか、どの程度内容を自分のものとしているのかが分からず、まるで雲の中を手探りで進むような感じがした。

次に2年生の講読の授業であるが、前期はLe Petit Nicolasという教材を選び、範囲を指定して学生に訳させて提出させ、間違いの多い箇所の文法説明をし、模範解答を示した。これは子供向けのお話で、もちろん大人も大いに楽しめる内容だが、ちょっと文章にひねりがきいており、1話ごとに「オチ」がついていたりして、訳するのはなかなか難しい。学生の提出する答案には、「珍訳」「迷訳」が目白押しで、大笑いしながら添削し、だいぶ楽しませてもらった。

さらに、上級フランス語では、Guillaume MussoのDemainという小説を読んで訳するという授業を行なった。この小説には、古今東西の文学が登場し、また、現代の医療、映画、ドラマ、音楽、漫画、新聞、メール、グルメ、建築などあらゆるジャンルが盛り込まれているた

めに、幅広い知識を学ぶことができ、教材としてはかなり優れていると感じる。また、相当凝ったレトリックが駆使されており、さらに『24』というアメリカのテレビ・ドラマをしのぐ「どんでんがえし」の連続で、学生たちには相当ハードな教材であったと思う。この授業でも、範囲を指定して訳を提出させ、間違った部分を説明し、訳して学生にフィード・バックを行なった。

以上が2020年度の前期の授業である。とにかく、まったくわけがわからないままに、無我夢中で授業を行なった、という感じだった。ただし、成績に関しては、提出させた練習問題や、和訳や、またその他のレポートの採点を合わせると、きわめて妥当な線に落ち着いたように思われた。

この年の夏休み中にいろいろと情報を集め、後期からはWebexを使った双方向型の授業に移行した。私は、もともと2号館の映像言語メディアラボ付属のCALL教室で授業を行なってきているので、Webexでの授業は、形式的にはほぼ同じであり、その点ではとくにストレスは感じなかった。

まず1年生の文法の授業。こちらは、毎年使っている『フランス語のスタートライン』という教材に移行した。この教材は、Power Pointで副教材を作成し、学生はそれを見ながら別途作成のプリントに書き込んで学習を進める、という形式をとる。CALL教室においては、Power Pointの教材は、学生二人に共通するモニターに映し出すという形をとるが、Webexの場合は「共有する」という機能を使って学生に見せる形をとった。後期の授業を始めたときに衝撃を受けたのは、学生たちのほぼ全員がフランス語の発音をまったく身につけていないということだった。完全自習型の授業では、初修の外国語の発音を身につけるのがいかに困難か、ということ身を

もって知ったのである。したがって、後期の授業では、発音の習得にかなりの時間を割いた。また、その週に学んだ例文の中から、次の週の授業の冒頭にディクテを行ない、これを成績の基礎とした。

2年の講読の授業と「上級フランス語」の授業では、Webexによる双方向型の授業が威力を発揮し、ほぼストレスなく授業を進めることができた。2年の授業では、毎回あらかじめ学習範囲のテキストの和訳を提出させ、これを添削して、成績の基礎とした。授業本体以外に、かなりの量のレポート課題を出し、これらも成績の基礎とした。毎回、学生たちは一生懸命レポートを書いてくれたので、それらを読むのが非常に楽しみだった。

こうして2020年度の授業が終わった。2021年度の授業は、前年度の後期の授業をほぼ踏襲して行ない、かなり楽しんで授業を行なうことができた。

さて、この2年を通して困った点を挙げてみよう。

- 1) 一番困ったのは、電波の状況が悪くて、途中で参加できなくなる学生がいることだった。また、こちらの映像と音声は届いているのに、当該学生の映像と音声はこちらに届かない、ということもかなりあって、そういう学生は一方的に授業を聞くだけ、という状況になったので、とても可哀そうだった。
- 2) 一番多いクラスでは28人が受講していたが、そのうちの約半数がビデオをオンにしなかったため顔が見えず、学生とのつながりが持てなかった。また、ビデオをオンにしても、当てられた学生の映像が必ずしもスクリーンに出ないため、この場合も、隔靴搔痒の感が否めなかった。

次に、遠隔授業をしてよかったと思われる

点を挙げておく。

- 1) 遠隔授業の補助とするためにYouTubeでいろいろと教材を探したところ、思いのほか使えるものを数多く発見し、これらを学生に提供することができた。たとえば、アルファベットや数字の発音、母音や鼻母音、混成母音の発音の動画。これらは、いちど教えたあとで復習用に使ってもらおうと非常に高い効果を表わした。
- 2) それ以外にもフランス料理の動画、さらにそれと比較するための日本料理の動画（つまり、日仏の文化の違いを比較することが可能となる）、また、フランス各地の紹介の動画、フランス文化に関する動画など、大変興味深い動画をたくさん見つけた。
- 3) フランスの音楽家たちもだいぶ紹介したが、彼らが楽器を演奏する動画も非常に役立った。

ただ、学生たちが可哀そうだったのは、やはりキャンパスに来られないということだった。2020年の4月に入学した学生諸君は、2年間のあいだほとんどキャンパスに来ることができず、友人も作れないし、サークルや各種の催しにも参加できず、図書館の利用もままならない、また、映像言語メディアラボ所蔵の映画のDVDも見られないということで、あらためてキャンパス・ライフの価値を深く思い知らされる2年間であった。もう50年くらいも昔になるが、私はキャンパス・ライフを大いに楽しんだ記憶がある。当時、キャンパスで色々な人に会わなければ、たぶんいまのような人生を送っていなかっただろうと思われる。

2022年の4月からは「対面授業」をする予定であるが、最近のオミクロン株の状況を見ると、それもどうなるか分からない。コロナの猛威が早く収まることを切に祈るのみである。

「^{つよ}勁い言葉」と双方向オンライン授業の可能性

— 西安（秦始皇兵馬俑博物館）・福島県（大熊町）

商学部教授
山本 明

2021年6月8日、中央大学商学部事務室のご協力のもと、1年中国語の授業において、兵馬俑博物館とオンラインで繋ぎ、現地旅行会社部長でありトップガイドの王勇氏に案内をしていただいた。その後、学生全員が中国語で質問し、王勇氏は日本語で回答された。

その100分間にわたる「^{交 流}授業」の記録動画と報告書は以下のサイトでご高覧頂ければ幸いです（[特別講義 | 中央大学 \(chuo-u.ac.jp\)](#)—動画公開は3月末まで）。以上で当機関誌への責は果たし得たと考える。従って以下は余談である。

中央大学に奉職以来27年間中国語を教えに来た。その間、記憶に刻まれるほどの「勁い言葉」を教えたいと願ってきた。「勁い言葉」とは何か、如何にすれば教えうるのか、増々わからない。何が記憶に刻まれやすいかは、一人一人異なる。あるものには音の響きが、あるものには静止画像が、あるものには動画が、あるものには論理的な構造が刺さるからである。データリッチ化さえすれば複数の感覚にも射程が届くだろう、その程度の、一方的な企画が上記の授業であった。

博物館に入ると、整然と並ぶ6000体あまりの兵馬俑が映し出される。教科書等で見慣れたはずの映像である。次にカメラは発掘時の写真をアップにする。折り重なって倒れた兵馬俑達、彼らを守る屋根だった垂木と蓆が広範囲に焼け落ちた痕跡が大写しになる。次に考古学者達が一体一体を、途方もない時間を

かけ、破片から修復している現場が映し出される。その上でカメラはもう一度振り返る。視界の果てまで満ち溢れる集団生命体のような兵馬俑群である。カメラは博物館を出て、沿道に立ち並ぶ商店群、流れる観光客達を捉える。観光地では見慣れたはずの商店街である。ただそこではMAUが12億人に達するゲータイプラットフォームから、記念品がキャッシュレスで決済され、ロコミが高速増殖している。

兵馬俑は一人一人異なる。モデルとなった人物の痕跡なのである。一時、大きな炎は集団生命体を焼き払い、痕跡は眠りにつく。しかし、人の手により、大きな炎を凌ぐ通時的生命力により、元の姿を取り戻す。教科書の写真、焼け跡の写真、そして現在の映像が多重露光されることで、その場所に貫流する生命力に、学生達は気づくことになる。

そうした場所で学生達は問いかけ、王勇氏は答えていく。例えば、中国企業にあって日本企業にないものが尋ねられると、ホワウェイ45才定年制に象徴される実験性と変化のスピード、それが急成長した中国企業群に共通するエートスであると説明される。いずれも事前に準備された中国語であり、準備された日本語である。しかし瞬間、言葉が立ち上がってくる。第1に2200年前から未来へと続く集団生命体のエネルギーが横溢している場所で、第2に勃興するライブコマースをヒントに斬新なオンラインツアーを次々に開発し、自身の会社の雇用を守った王勇氏を通じ

て届けられる時、言葉は意味ではなく、肉体を持って根付きあうからである。

2021年11月20日、中央大学ボランティアセンター主催で「福島県・大熊町より、想いを繋ぐオンラインイベント～被災地の現状を知り、現在を問う」が実施された。被災者の木村紀夫氏は、大熊町の自宅の庭に腰を下ろし、問いかけてくる。自分の故郷の地を汚染土「中間」貯蔵施設地として国に譲れるか?電気を作ることが「生命を守る」ことというなら、電気がないと生きてはいけないのか?背後の花壇には黄色や紫色の花が咲き、倒れた親木から^{ひこぼえ}孫生えの桜などが枝を伸ばしている。

それに先立つ60分において(放射線量の問題からおそらく一日当たりの帰宅時間が制限されている中での60分において)、木村氏の車は最初に熊町小学校を訪れた。カメラは1年2組の窓ごしに震災当日のままの教室を、明るい木目の机と椅子、机に広げられたプリントや青い筆箱、壁を埋める授業のはり紙や写真などを映し出す。学校生活のにぎわいの痕跡が、亡くなられた次女・汐風(ゆうな)さんの痕跡が、光射しこむ空間に溢れている。そして窓ガラスには、撮影している木村氏、背後に生い茂る木々、そして青空が二重映しになっている。

気仙沼の記憶の箱舟(アーク)であるリアス・アーク美術館の常設展「東日本大震災の記録」には、被災物の炊飯器や時計、ランドセルなどが選ばれコラージュされている。ただ建築物と場所そのものの展示は不可能である。「廃校」のキャプションに「それまで聞こえていた子供たちの声が消え」ることが、地域にどれほど大きな影響を与えたかが記されている。木村氏は現場に立つことで、「学校」という空間、時間、生活をまるごと展示し、ご自身の存在をキャプションとした。

次に諏訪神社の前で4人の子供が輪になって踊る過去の写真が共有される。200年以上にわたって伝承される無形文化財、熊川稚児鹿舞(ししまい)である。獅子の面と鹿の角、鳥の羽をまとい、色とりどりの布をはためかせている。共有が停止された瞬間、車内のカメラは前を走る、汚染土壌を運ぶトラックと、汚染土壌が燃やされて立ちのぼる、遠くの白煙を映し出す。

稚児鹿舞は痕跡である。江戸時代から大きな災害や疫病とそれに打ち勝ってきた記憶の集積体のインデックスである。その反復想起のシステム、つまり失われていく記憶を救い、再生させ繋いでいく生命の流れが文化である。「祭りは町そのもの。原発のためにやめられっか」、「舞の先に故郷を見てるんだ」という保存会会長の言葉、舞をする理由を問われ「楽しいから」と答えた子供の言葉、それらは異郷の地で再び舞を目にして涙ぐむ大熊町の住人の映像と重ねられる時、肉体を持ち、^{ひこぼえ}孫生えの新たな芽が確認できるのである。

「生命を守る」という言葉も、無機質なオフィスで発せられるのと、一定の線量がありながら美しく手入れした庭を背景に、木村氏が背筋を伸ばして発するのでは、別物となる。「住民を守り、前へ進むのを助けるのが法律」なのだから、故郷の土地に家を再建するのを阻む法律などまげてしまえと、指導に来た公務員を追い返す言葉も、陸前高田の家屋が流失した場所を背景に発せられることで肉体を持つ。だからこそ実際に再建しえた新居の居間から、夕陽を見つつお茶をのむラストシーンは美しい。ドキュメンタリー映画『先祖になる』では、組織的状況判断とは異質な、その場所で自分が新たな先祖となるという個人の気概が記憶を繋いでいく。

記憶をレスキューする言葉は、個人や地域を超えて播種され発芽していく。

「人が集い、想いを伝える場づくりは勿論のこと、長井と浪江の二つの故郷の次代への繋ぎ役として全うする」という鈴木酒造の言葉がある（鈴木酒造は被災して酒蔵も酵母も失いながら、山形県長井に疎開して酒造りを続け、2021年故郷の浪江町でも生産を再開した）。この言葉は、疎開先の酒屋四代目の主人が鈴木酒造のブランド「磐城壽」をカメラに近づけ、もはや地元の酒蔵のようだと、古民家の囲炉裏端で熱く語る映像と重なる時、他の地域にも根を張ったことが見て取れる。

「ワインのブランド名を Ginkgo (イチョウ) にしたのは、被爆した広島でイチョウが真っ先に再生したから」という日本人醸造家百花草梨紗氏の言葉がある（実際広島の老木は焼け跡を残しながら、被爆の翌年から^{ひこぼえ}孫生えが芽吹き、人々に希望を与えた）。この言葉は、やせた土壌に深く根を伸ばしてより生を濃縮させる老樹の葡萄畑を背景にする時、肉体を持つ。そして彼女が立っているのはフランスのボルドーなのである。

言葉は発想を規定するもの、つまり文化を形成するものであり、文化とは風土の記憶のビックデータである。ならば、記憶さえもレスキューできる「強い言葉」とは、風土を背景として、風土の表象である個人から発せられることで、肉体をもって根付きあうものではないか。たとえ想起が苦痛と疲労を不可避としてもである。双方向オンライン教育は空間も時間も超えるのみならず、それらの多重露光を実現しうる。その点で、言葉を意味伝達的手段としたり、分析対象の標本とする「^{ガイド}授業」以外の可能性を有しているのではないか。5つのクラスで授業をしていただく過程で王勇氏は、途中から「ガイド」ではなく「交流」という言葉を使い始められた。「強い言葉」とは自己完結的な何かではなく、一方的に教

えるものでもなく、聞き手の中にも記憶を繋ぎ、^{ひこぼえ}孫生えを生む、双方向性を有するものなのであろう。

進化と Evolution

理工学部教授

上村 慎治

イチローをはじめ、多くのアスリートが進化されると言われる。似た表現があまりに多いので、私も含め、生命科学の分野の専門家は諦め気味で、そうこだわらなくなったのは事実である。それほど、日本語での進化という言葉の意味が変化して来た。また、この2~3年の間のコロナウイルス変異株の『進化』ぶりが話題にもなっているので、ここでは、生物学における『進化』という言葉の定義をあらためてご紹介したい。

進化は、英語の Evolution、ラテン語の”evolvere (展開)”が語源である。巻物の様なものを開け広げてゆくような行為であるとも紹介されている。生物学的な『進化』は、最初、ダーウィン(C. Darwin, 1809-1882)の著書、「種の起源 (On the Origin of Species)」ではじめて紹介された概念である。ダーウィンは、ガラパゴス諸島の鳥(フィンチ)のくちばしが、島ごとに異なる食性を反映するかのようにな多様な形状をしている様子を観察して、生物の種や形態は、けっして固定的なものではなく変貌しうる(modified)ものであると洞察したのである。同時代のイギリスの哲学者・社会学者、ハーバート・スペンサー(Herbert Spencer, 1820-1903)が、ダーウィンの主張する『進化』も含めて、人間社会の進歩・変遷について議論する時に、Evolutionという言葉を使ったことがはじまりとされている。

『進化』の考え方を明治時代の日本へ導入したのが、東京医学校予科の講師、ドイツ人動物学者のヒルゲンドルフ(Franz M. Hilgendorf, 1839-1904)や東京大学理学部のアメリカ人動物学者のモース(Edward S.

Morse, 1838-1925)である。それぞれ、日本の黎明期となる生物学の分野で重要な足跡を残した研究者である。彼らの大学で行った時の講義ノートを翻訳したものに、他の訳語に混ざって『進化』という言葉が作られたとも言われている。同時期に社会進化論や弱肉強食を論じる上で使われた人間社会のEvolutionの訳語となる「進化」が、生物学上の『進化』と同じ意味であるかのように使われた経緯がある。この辺りが、日本国内で、特別な「進化」という言葉が進化してきた原因かも知れない。無論、英語でのEvolutionにも、さまざまな意味の使い方があるのは事実のようなではあるが、もともとは進歩するというニュアンスはない。

生物学で言う『進化』する上で原動力となるのは、アスリートのような努力や強い意思ではない。多様性と自然選択である。この共通の理解があるので、イチローが進化するという表現に生物学者が強く抵抗している。生物学的に『進化』するには、環境適応や生存競争の末に、うまく生き残った複数の個体、つまり、生物集団が存在していることが大前提となる。お一人しかおられない鈴木一朗選手は、けっして『進化』し得ないのである。現在、生物学の教科書に記載されている厳密な『進化』の定義は以下の通りである。

『進化』とは、一つの種からなる遺伝的に多様な生物集団がいて、その中で交配を繰り返して、ある数の世代を経たとき、着目する遺伝子の種類や存在頻度が変化することである。例えば、黒色と白色の毛のネズミが混在している集団で、次世代で白毛の個体数(厳密には、それを支配する遺伝子の比率)が変化し

た時、これを生物学的に『進化』したという。それで進歩するわけでも、高い運動パフォーマンスを獲得する訳でもない。

その『進化』を引き起こす要因はさまざまである。白いネズミの方が病気にかかりやすい、タカなどの天敵に見つかりやすい、太陽光を吸収しにくいので寒さに弱い、オスが目立ってメスに好まれる傾向があるなどなど、さまざまである。これを選択（＝淘汰）という。自然に起これば自然選択、人工的に起これば人為選択となり、天災などが偶然に引き起こすこともある。こういった選択が作用すると生物は必ず『進化』を始める。この概念が、一般的に言われるイチローの進化から、いかにほど遠いのがおわかりいただけるかと思う。方向付けされた変化、操作可能な変化を議論する社会科学的な「進化」とも、もちろん、異なる概念である。

生物の『進化』の特徴は、サイコロをランダムに振るように、偶然の作用が大きく影響する。最先端の生命科学の技術、遺伝子編集技術などを駆使しない限り、意図した『進化』を引き起こすことはできない。白い毛も黒い毛も、もとをたどれば、毛の色を支配するある遺伝子が、オン・オフになる二者択一の過程があっただけである。そのランダムな選択が、その後のネズミ集団の運命を決めることになる。この点で、どのような特性が生まれるのか、どれが選択されるのか、未来はけっして予測できない。また、『進化』の歴史を過去に遡って再現したり、復活させたりすることは、ほぼ、不可能である。

ダーウィンやラマルクの時代の曖昧な『進化』の議論は、現在、私たちはすべて DNA レベルでの精密な理論へと置き換えて考えることができるようになった。これは 20 世紀の生命科学分野の大きな発展のおかげである。問題は、あまりに現象が複雑で、すべてを綿密に紐解くとすると、話しは別である。環境保護の専門家が、種の保全を声高に訴えるのは、

数十億年の地球の歴史で培って来たものは、上の理由で、時を戻せないし、人力では決して回復できないと分かっているからである。

最後に、この所の話題になっている COVID-19 の『進化』についてもご紹介したい。ウイルスは、自力では増殖できないので、生物という範疇には入れない習慣である。また、ウイルス同士は交配できないので、ウイルスの集団が互いに遺伝子をまぜこぜにしながら、次の世代へと伝えることは、おそらくないとされている。

コロナウイルスの変異株がどのように生まれるかと言うと、サイコロを振る原理と同じで、高頻度で遺伝子複製の誤りを繰り返し、遺伝情報を変貌させるからである。正確に言えば、変化した遺伝子を補修してもとの正確な形に戻すしくみを持っていないからである。この絶えず変貌する性質が、『進化』を速める大きな要因となる。あとは、自然選択が後押しするだけである。人の集団で互いに感染させ合う頻度、そして、ウイルス株の種類で症状が異なり人の行動パターンへの影響などによって選択圧が微妙に変化する。乾燥や温度変化に強い・弱い、鼻腔の細胞につきやすい・つきにくい、などの性質の違いがあれば、この自然選択の作用は、さらに多様にはたらくであろう。

2021 年夏に興味深い論文が発表された^[1]。体内に侵入したウイルスと最初に結合したり、その遺伝子と相互作用したりするさまざまなタンパク質を私たちの細胞は自前で持っている。それらをこの論文では VIPs (Virus-interacting proteins) と呼んでいるが、この VIPs 遺伝子 300 種ほどを詳細に解析すると、東アジア人集団で特徴的な多様性が見られると言う。遺伝子は、何もしなくてもサイコロを振って変わってゆくのであるが、同時に、盛んに自然選択の洗礼を受けた時点がいつかも遡って推測可能である。それが 2.5 万年ほど前であると推測されている。おそらく、

その頃、強いコロナ禍にさらされた東アジアの歴史があったのではないかと、この論文の著者たちは推測している。進化するのはコロナウイルスばかりではなく、コロナ禍にさらされたヒトの集団も同じと言うことになる。この現象は『共進化』と呼ばれている。

同じ原理で、2019年暮れ以降、私たちが経験して来た COVID-19 の課題は、直接的・間接的に、社会のしくみに大きく影響しつつあるのは確かなようである。同時に、私たちの遺伝子までも変えつつあり、ヒトの『共進化』を引き起こしつつあるのも事実かも知れない。イチローが進化したように、人間社会もその知恵をうまく使って賢く「進化」することができるのだろうか。残念ながら、それに yes と明確に答える自信はない。

[1] Souilmi Y. et al., An ancient viral epidemic involving host coronavirus interacing gene more than 20,000 years ago in East Asia. *Curr. Biol.*, 31:3504-3514 (2021).

— 2021 年度実績報告 —

映像言語メディアラボ運営委員会委員

1. 規程第二条第一号の委員 (学部長)

猪股孝史 (法)
山崎 朗 (経) (2021/10/31 まで) 佐藤拓也 (経) (2021/11/1～)
渡辺岳夫 (商) (2021/10/31 まで) 井上義朗 (商) (2021/11/1～)
檜山和男 (理) (2021/10/31 まで) 梅田和昇 (理) (2021/11/1～)
宇佐美 毅 (文) (2021/10/31 まで) 新原道信 (文) (2021/11/1～)
青木英孝 (総)
中迫俊逸 (国際経営)
平野 晋 (国際情報)

2. 規程第二条第二号の委員 (学部選出)

(任期: 2021 年 4 月 1 日～2022 年 3 月 31 日)

浅岡夢二 (法・委員長) 上村慎治 (理)
牧野ウーヴェ (法) ブラウン, マイケル デニス (理)
中村文紀 (法) 鈴木満子 (理)
牧野武彦 (経) フェリエ, ミカエル (文)
伊藤秀一 (経) マシューズ, ジョン (文)
杜崎群傑 (経) 石村 広 (文)
垂井泰子 (商) マシューズ, サイ エルザ (総)
二宮理佳 (商) シング マヘンデラ (国際経営)
山本 明 (商) 斎藤裕紀恵 (国際情報)

3. 規程第二条第三号の委員 (学事部長)

久保田 芳 昭

4. 規程第八条 (幹事)

谷 祐 史 (兼務事務室長) 太田 恵 介 (兼務課員)
西 條 貴 陽 (兼務課員) 安 富 文 彦 (囑託)

映像言語メディアラボ委員会議題

「運営委員会」「常任委員会」

第1回（2021年4月30日（金）開催）

- | | |
|------|--|
| 議 題 | 1. 映像言語メディアラボ運営委員会委員長の選出について
2. 映像言語メディアラボ常任委員会委員長・委員の選出について
3. 大学評価組織別評価委員会委員の選出について
4. 映像言語メディアラボ運営委員会幹事の選出について |
| 報告事項 | 1. LL 特設講座の2022年度以降からの閉講について
2. CALL 教室リプレースに関する依頼事項について |

第2回（2021年6月29日（火）開催）

- | | |
|------|---|
| 議 題 | 1. MALL システム（CaLabo MX）導入について |
| 報告事項 | 1. 映像言語メディアラボ常任委員会委員及び大学評価組織別委員会委員選出結果について
2. LL 特設講座の2022年度での閉講について |

第3回（2021年11月29日（月）開催）

- | | |
|------|--|
| 議 題 | 1. 2021-22年度のAV誌編集委員の選出について
2. 教材管理業務の移管に関する今後の方針について
3. 所蔵教材（媒体別）の除籍（徐架または除却・抹消）について |
| 報告事項 | 1. 2022年度以降の2号館1階教室の運営について
2. 2021年度の教材購入について
3. 2022年度予算申請について
4. 第1回・第2回映像言語メディアラボ運営委員会議事概要について |

映像言語メディアラボ運営・管理業務

I. 教室関係

1. LL 特設講座

全コースとも開講せず

2. AV 自習室

前 期： 2021 年 4 月 9 日～7 月 22 日 後 期： 2021 年 9 月 21 日～2022 年 1 月 28 日

3. IT 自習室

新型コロナウイルス感染症対応のため、年間を通し閉室した

4. 学部設置科目授業（補講・試験期間を含む）

前 期： 2021 年 4 月 9 日～7 月 22 日 後 期： 2021 年 9 月 21 日～2022 年 1 月 28 日

5. 法学部通信教育課程授業

1 期： 2021 年 8 月 11 日～8 月 13 日

2 期： 2021 年 8 月 14 日～8 月 16 日

3 期： 2021 年 8 月 17 日～8 月 19 日

II. その他

1. A-V 59 号発行：2022 年 3 月 25 日

2021年度 映像言語メディアラボ教室使用数

2021.4.9～2022.1.19

	法学部		経済学部		商学部		理工学部		文学部		総合政策学部		その他		合計	
	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者	授業	履修者
通年	0	0	0	0	0	0	0	0	5	81	0	0	4	4	9	85
半期	35	611	15	305	6	106	0	0	8	119	0	0	9	107	73	1,248
臨時	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	35	611	15	305	6	106	0	0	13	200	0	0	13	111	82	1,333

※ その他は、LL特設講座、全学共通科目 (FLP授業、短期留学)、大学院、通信教育スクーリング、学内各部課室等
 ※ 2016年度より通年・半期は科目の学期により算出した。

2021年度 AV自習室学部別利用者数(人)

2021.4.9～2022.1.19

	法学部		経済学部		商学部		理工学部		文学部		総合政策学部		国際経営学部		国際情報学部	
	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	持	
DVD	56	1	13	0	13	0	0	0	35	0	1	0	1	0	0	0
LD	0	0	1	0	1	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0
VHS	0	0	0	0	0	0	0	0	3	1	0	0	0	0	0	0
CT	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
CD	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
衛星放送	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	57	2	14	0	14	0	0	0	39	1	1	0	1	0	0	0

	大学院		合計	
	持	持	持	持
DVD	0	1	119	2
LD	0	0	3	0
VHS	0	0	3	1
CT	0	0	0	0
CD	0	0	1	1
衛星放送	0	0	0	0
合計	0	1	126	4

※ 持 はソフト持ちこみ利用者数
 ※ 利用者は延べ人数

2021年度 IT自習室学部別利用者数(人)

2021.4.9～2022.1.19

	法学部	経済学部	商学部	理工学部	文学部	総合政策学部	国際経営学部	国際情報学部	大学院	合計
インターネット検索	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
語学の自習	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
文書・資料作成	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
その他	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
合計	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0

※2021年度は、新型コロナウイルス感染症対応で、対面授業とオンラインの併用となったが、IT自習室は閉室としたため、IT自習室利用者数統計はすべて0となっている。なお、AV自習室は開室したため利用者数を算出している。

2021年度購入教材一覧

C/N	分野/ 主題/ 内容	原題 = 邦題 / 制作者、頒布者、制作年、頒布年、 (シリーズタイトル; 巻次)	映像 言語	授業 利用	館内 視	館内 上	学内 貸	学外 貸
13956	Movie(Documentary)	アイたちの学校 / 発売:アルミード, 販売:オデッサエンタテインメント 2019	jpn	不明	○	○	○	○